東京の教育
復刊第二十六号　東京都教師会発行
（事務局）横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三一〇

日本教師会 第六十一回教育研究大会報告

佐藤健二

標記教育研究大会が八月五・六日の日程で、岐阜駅に直結するハートフルスクエアで開催された。岐阜市の夏は暑い。毎年最高気温を記録する炎暑の街である。しかし、岐阜駅に降りたときに今年はそれほど暑いという感じがしなかった。関東が、連日三十五度を超える猛暑を記録して、暑さに身体が慣れていたからであろうか。

五日六日の二日で実施されたが、研究大会は初日のみで、二日目は関ヶ原の古戦場巡検という日程が組まれていた。そのために開会式は例年午後であったが、十時に始まった。開会の辞を副会長として私佐藤が行ない、国歌斉唱、渡邊毅会長の挨拶、歓迎の挨拶を岐阜県教育懇話会の橋本秀雄会長がされ、最後に全国教育関係神職協議会監事の冨田主計氏が来賓として挨拶をされて開会式は終了した。

渡邊毅会長の挨拶

続いてすぐに記念講演が行なわれた。皇學館大学教育学部教授・渡邊会長による講演で、演題は「教師の使命とこれからの教師会」。

まず日本の教師の現状を種々のデータで示し、特に日本の教師はＯＥＣＤの行なった国際比較のデータによっても、他の国の教師に比べて「自己効力感」が低いという指摘があった。「自己効力感」が低いというのはどういうことか。「自分が直面している課題を克服できるだろうという期待や自信が低い」ということである。これが低い人は疲労感を感じやすいと言う。日本の教師に精神疾患が多いのも、このことと関係するのではないか。

次に教師の「使命感」の話になった。教師の使命感はソーシャルサポートとレジリエンスに支えられていると言う。「レジリエンス」とは、「逆境に対する心の回復力」ということを表す概念である。

このレジリエンスの強い人物として、ナチスの強制収容所を生き抜いた精神分析学者のフランクル（その著『夜と霧』は日本でもベストセラー）と松下幸之助を紹介。「社会に貢献するという自覚」つまり自らの「使命感」が、辛さにも堪える力となり、他者のみならず自らも幸せにするのだと言う。

最後にこれからの日本教師会の在り方として、教師会の使命は今までも「破邪顕正」であった。「破邪」とは「教育正常化」であり、「顕正」とは「日本にふさわしい教育を展開することである」。そのためにこれからの教師会として四つの目標を提示された。要約すると、一つ、会員一人一人が日本にふさわしい教育実践をすること、二つ、各支部で研修会を実践して、知識技能や見識、人格を高める学びを仲間と共に行なうということ、三つ、「日本にふさわしい教育」を提言していくということ、四つ、「日本にふさわしくない教育」に対し、厳正中立の立場から批判し正常化する活動を続けるということ。

以上のように今後の教師会活動の指針を示された。大変示唆に富む講演であった。

昼食を挟んで、午後一時から実践発表が行なわれた。

小学校では、本会会員世田谷区立多聞小学校教諭の伊藤優先生による「偉人語りで子供たちの志を育む」という発表がなされた。先生自身の体験として、小学校の時に先生から、日本はアジアを侵略した悪い国だという話を何度も聴くうちに本当にそう思うようになり、自己肯定感が低く、命の尊さを感じることもなかった。しかし祖父がシベリアに抑留され、極寒の地で耐え抜いたことを知り、そのことについて考えることにより、耐え抜いて日本に戻る事が出来たからこそ今の自分があるのだということに気づき、自分の命の尊さに目覚めた。つまり今自分がこうしてあるのは、先祖や先人が様々な苦難を乗り越え

て命を繋いでくれたからなのだということに気づいた。

そこでそのような優れた先人について、伝記を通して子供達に伝えることで、子供達に自己肯定感や生きる力がつくのではないかと思った。荒れている小２のクラス担任をしたときに、偉人伝を語り聴かせるという実践をした。偉人語りをするうちに、それまで立ち歩きをしたり、給食にチョークの粉を入れたり、黒板消しを切って壊したりするような荒れていたクラスが、授業中もみなちゃんと座って授業を聴き、給食も完食するようになり、いたずらをするような子供もいなくなってきたというのである。

恐らく伊藤先生自身が、そういった子供たちの変化に驚き、子供たちにとって目標となるべき人物、自らの志を立てる上での指針となるべき人物についての学びがいかに大切かを発見されたのだと思う。感銘深い発表であった。

中学校の発表は、大阪浪速中学校高等学校教諭の松尾大輔先生の「オンライン研修の成果と課題」と題する発表であった。先生の学校は早くからオンライン授業対応の環境が整備されていたので、今回の新型コロナによるリモート授業にも素早く対応できたと言う。

また先生が中心となりリモート研修会ＥＭＡを立ち上げ、「研修をデザインする」ということで仲間と実践活動を続けている。その運営は、①自分語りの設定、②困り感に寄り添う企画、③若い教師や民間の力、④ベテラン教師に実践と人生を学ぶ、⑤共通の研究の実践、⑥流行のみに左右されず、日本にふさわしい教育の在り方を探る、といったことを意識しながら進めている。

松尾先生のいつもながらの元気溢れる発表に、日本の教育の将来に少し明るさを感じた。

高等学校の発表は、元岐阜県県立特別支援学校校長の坂口浩之先生による「生徒と教職員の心を耕すスピーチの実践」と題する発表であった。先生は校長として年間二百回ほどのスピーチをされていたそうである。そのとき心掛けていたことがスピーチをとおして「聞き手の心に響き心を耕す発信をする」ということである。そのためには平生から子供達との関わり方を含め相応の工夫が必要である。そして実際のスピーチの事例をいくつか紹介された。いずれも具体的な話題により、聞き手の興味を引くように工夫されており、例えば五百年ほど前に描かれた田植えの風俗画を見せながら当時の早乙女の風俗に触れて、そこから唱歌「夏は来ぬ」の歌詞に触れるとか、人との出会いについての話では、古代中国の「韓信の股くぐり」という有名な故事を引いて、韓信がいかにして有名な軍師と出会い、師に学んだかを話す。

こういった興味深い話を用意することで、子供達の心を耕す実践を続けてこられたということであった。

その後、総会では本会の佐佐木先生を議長に選出、議案審議を行なったが、次期開催地として、活動を再開した三重県教師会が主管となり伊勢の皇學館大学を会場として行なわれることが承認された。続いて閉会式が行なわれた。

翌日は希望者対象の巡検。クルマ三台に分乗し、岐阜県教育懇話会の先生方による現地での解説を聞きながら、関ヶ原の戦跡を巡った。まず西軍石田三成の拠点となった大垣城を見学、その後杭瀬川古戦場、関ヶ原古戦場記念館、大谷吉継陣跡と墓地等を見学、ここに詳しく報告することはできないが、やはり現地に行って実際にその地の風景や空気感、距離感などに接するがいかに重要か改めて知ることができた。

猛暑の中、下見等準備をし、資料を作成し、当日解説に当たって下さった岐阜県教育懇話会の先生方に、この場を借りて改めて厚く御礼申上げる。

戦前の中学国語の教科書を読む（二十）

「次の文章は、八波則吉編『現代國語讀本　巻六』（昭和十年修正七版）（現在の中学三年後期相当）所収のものである。漢

字、送り仮名は原文通り、読み仮名は適宜新たに加へた。」

生命の雄辯

永井柳太郎

グラッドストンは、嘗て雄辯の祕訣を尋ねた一青年に書を與へて次のやうにいつた。「(一)用語は平易を尊び簡潔なのを選ぶこと、(二)句もまた出來る限り短く切ること、(三)發音の明瞭を心がけること、(四)批評家や反對者を待たないで、自分で豫め論點を考檢すること、(五)論題について再思三考して十分に消化し、適切な語を迅速に拈出する練習をすること、(六)思考を論題に集中し、常に聽衆を見守ること。しかし、此等の凡べてが具備したからといつても、誰でも直ちに雄辯家になれるとは限らぬ。眞の雄辯家になるのには、此等の根柢に於て燃えるやうな信念を有してゐなければならぬ」と。大雄辯は畢竟するに大信念の別名に外ならぬのである。

聖書に、「たとひ我もろ〳〵の人の言葉及び天の使の言葉を語るとも、若し愛なくば、鳴る鐘や響く鐃鈸の如し。」とあるのもこの意味である。何等の信念もなく熱誠もない人が、徒に美辭・麗句を連ね、わざとらしい身振をして、無用な辯を弄する時ほど、人に不快の念を與へて、その反感を挑發するものはない。これに反して、その熱血・熱涙が迸る時には、たとひその言語は訥々であり、またその研究が不十分であつても、おのづから聽者をして襟を正させ感激させるのに足るものがある。ニイチェはいつた、「凡べての書物の中、余はたゞ人が熱血を以て書きたるもののみを愛す。熱血を以て書け。熱血は生命なればなり。」と。滿腔の熱血、これを抑へようとしても抑へることが出來ず、一管の筆端に溢れたものがそのまゝ金玉の文字となつて、以て一世を風靡すると同樣に、滿腔の熱血、これを抑へようとしても抑へることが出來ず、そのまゝ三寸の舌端に發して、始めて鬼神を泣かせる大雄辯となるのである。

グラッドストン

この點から考へる時は、釋迦や孔子や耶蘇や日蓮のやうな大聖が、凡べて雄辯の人であつたのは怪しむに足らぬ。三界の大導師としての釋迦の生涯それ自身は不朽の大說教であり、孔子の言々句々もまた凡べて經世の大雄辯であつた。耶蘇の有名な「山上の垂訓」の如き、天の鳥を指して天父の慈愛を論じ地上の百合を示して攝理の幽玄を說いた。これを聽いたものは、いづれもその說くところの、「學者の如くならず、權威あるものの如く」なるに感歎したのであつた。日蓮の「立正安國」の叫、親鸞の「善を欲せず、また惡を恐れず、如來の本願に優れる善なく、如來の本願を妨ぐるほどの惡なし。」といつた、善惡を超越した絕對我の聲、またいづれか不滅の雄辯でないものがあらう。しかも此等の大雄辯は區々たる口舌の技巧でなく、實に彼等大聖の崇高な信念と深刻な體驗と聰明な叡智と純眞な情熱とから迸出した生命そのものの雄辯であつた。

政治家となるのに必要な條件は種々あらうけれども、私はその最も大なるものは、第一に天地に通ずる不拔の信念、第二に社會の要求を知る聰明、第三に社會をして自己を理解させるのに足る雄辯であると思ふ。如何に不拔の信念を以て社會に臨み、よくその社會の缺陷を知つてこれを救はうと思つても、社會が自己を理解せず、自己に聽從することを肯じない時は、到底その政治的理想を遂行することが出來ぬ。シェークスピヤはその著名な脚本「ジュリヤス・シーザー」において、大なる教訓を與へて居る。ブルータスはローマ人の自由のためにシーザーを刺した。やがて外へ出て群衆に對し、「シーザーを愛すること淺きが故にあらず、ローマを愛すること深ければなり。」と叫ぶや、群衆は歡呼してブルータスを迎へた。ところがアントニーがシーザーの血に塗れた外套を携へ來つて、これを群衆の前に掲げ、まづシーザーがいかにローマの市民を愛したかを述べ、シーザーはその全財產をローマ人に與へるべき遺言を殘したといつてローマ人を感動させ、やがてその外套の血に塗れ

日蓮の辻說法（野田九浦筆）

たところを指して、「見よ、これシーザーが天使の如く愛したるブルータスの刺したるものなるぞ。ブルータスの短刀を追ひかけて外に迸り出でたるシーザーの血の痕を見よ。」と叫ぶや、感動した群衆は號泣し激昂し憤怒して、遂に戈を逆さまにしてブルータスを屠るに至つた。ブルータスが果してローマ人の自由のためにシーザーを刺したかどうかは歴史上の疑問であるが、假にローマ人の自由のために刺したのであるとしても、ブルータスはアントニーの非難に對し、よく自己の心事をローマ人に徹底させることが出來なかつたために斃れたのである。かやうな事實によつても、民衆とともに民衆のために事を爲さうと欲するものは、自己を民衆に理解させるのに十分な言論を必要とすることが明白である。

（永井柳太郎氏大演説集）

アントニーの演説

【原注】

永井柳太郎　金澤市の人。明治十四年生。政治家。

グラッドストン　イギリスの政治家（1809-1898）

ニイチェ　ドイツの哲學者（1844-1900）

日蓮　安房國（千葉縣）の人。日蓮宗の開祖。弘安五年（一二八二）歿。年六十一。

天の鳥　新約全書馬太傳（またいでん）第六章に「空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝等の天の父はこれを養ひ給ふ」

地上の百合　同章に、「野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず紡がざるなり」

親鸞　日野氏。京都の人。淨土眞宗の開祖。弘長二年（一二六三）歿。年九十。

シェークスピア　英國の大戯曲作家（1564-1616）

シーザー　ローマの政治家（前100-前40）

ブルータス　シーザーの甥。

アントニー　ローマの政治家。（前83-前30）

（編集者注）

生没年は、外国人は西暦で示されてゐるが、日本人は皇紀による。例へば、日蓮の一九四一年といふのは、六六〇を引いて、西暦では一二八一年といふこととなる。

永井柳太郎は、戦前政治家として拓務大臣、逓信大臣、鉄道大臣を務めた。昭和十九年没。年六十三。三木内閣の時文部大臣となつた永井道雄氏は、柳太郎氏の次男である。

□短信寸評□

「ＮＨＫ」のラジオ番組に「ラジオ体操」（当初は「国民保健体操」「ラヂオ体操」）がある。国民の体力向上と健康の保持増進を目的とした一般向けの体操で、昭和三年に放送が開始された。今から九十五年前である。翌々年には神田万世橋署の面高叶巡査がラジオ体操の会を始め、今のやうな街角での体操会が普及した。

その後「ラジオ体操」は数曲作られ、内容にも変遷はあるものの、おほよそ現在のやうな形で続いてゐる。第一放送で毎日朝の六時三十分前後、第二放送では日曜を除く毎日、一日三回、併せて四回放送されてゐる。

経営方針や報道姿勢などの問題に加へ、テレビ番組が惨憺たる状況になつた昨今だが、ラジオではまだまともな番組が放送されてゐるのである。

（ふ）

日本教師会研究大会について

来年度、令和六年は第六十二回教育研究大会として、三重県教師会の主管で三重県伊勢市内で開催される予定になっている。

お願い

一、会費納入

年額　二千円

口座　「みずほ銀行」港北ニュータウン支店

店番号　７４３　普通預金　１３３０１５０

名義　佐藤健二

二、原稿募集

「東京の教育」への会員の皆様のご投稿をお待ちしています。

三千字程度まで。古典現代の仮名遣いは統一して下さい。写真や図版も対応します。

送り先は題字下にあります。また、メールの送り先は次の通りです。

事務局アドレス（佐藤）

komasato@juno.ocn.ne.jp